

ケースメソッド授業のCS分析

川野 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2012年11月8日受付、2012年12月13日受理)

要 旨

ケースメソッド授業に関する授業アンケートについて、マーケティングで行われているCS分析を適用した。授業の中で教員が感じていることが、CS分析では改善度指数としてデータとして得られた。項目「あなたはこの授業に存在感がありましたか」、「私はクラス討論で積極的に発言した」の2つは、すぐにも改善を図ることが必要である。また項目「今日のグループ討論はうまくできると思う」は、すぐではないが改善を要する内容であることが分かった。CS分析は授業改善に役立ち、ケースメソッド授業は学生の学ぶ意欲を高める方法として有効である。

1 研究課題

一般企業では、消費者の商品購買力を上げる様々な取り組みが進められている。他企業との熾烈な競争が行われており、そこには様々な企業戦略が図られている。いかに他企業との差別化を図って生き残っていくか、表面には現れない競争である。競争は国内ばかりでなく、グローバル化した現在では、国外の世界各国との競争を視野に入れた戦略を構築していく必要がある。製造業やサービス業では消費者の購買力を高めるために多くの市場調査が行われている。商品一つにしても、その商品の何が消費者の購買力につながったのか、消費者のニーズは何かなど、様々な方法を駆使したマーケティングがなされている。その一つに顧客満足度を測る視点からのデータ分析がある。新しい店舗を出すにしても、また店舗のどのような要素が客層の商品購買の向上につながるのか、その分析は重要なことである。

社会の変化にあまり左右されない大学においても、国公立大学の独立行政法人化に伴い、各大学でも自校の特色を出すべく取り組みが行われ始めている。典型例は大学の秋入学である。外国の優秀な学生を自校に入学させるべく、各大学ではその検討が始まったばかりである。大学は学生の入学数は死活問題である。私学では特に入学してくる学生数を確保しないことには、大学経営が成り立っていかない。そのためAO入試をはじめ、最近アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを大学の特色ある取り組みの一つに掲げて、社会に受け入れられる人材の育成を図っている。

本研究は、大学で行われる授業について、学生の満足度を調べてみる視点から授業を見直し、授業改善を図る具体策について考察するものである⁽¹⁾。大学の授業に関しては、FD委

員会などが中心になって学生による授業評価が行われている。またその結果については、ネット上で公表している大学もみられる⁽²⁾。本学でも毎年、授業の終わりの時期にフィードバックアンケートが実施されており、その結果の活用に関しては教員に任されている。

授業改善の取り組みは様々な分野と機会で行われているが、今回は平成23年度後期授業科目「特別活動指導法（初等・中等）」で実践した第5回目ケースメソッド授業について、企業で見られるCS分析の手法を取り入れた授業分析について述べていく。

2 研究内容

先ず、最初にケースメソッド授業の概略について述べる。次に授業アンケート調査の結果とCS分析について考えていきたい。

(1) ケースメソッド授業

ケースメソッド授業は、ケース教材を作成しそれを中心に討論を進めていく授業であり、教職を目指す学生にとって、学校現場に関わる実践的指導力を身に付ける手法として効果的である。ケースメソッド授業では、ケース教材を通して、学生が事前に自ら考えてケースレポートを準備し、そのレポートをもとにグループ討論やクラス討論を行い、教員としての思考力、判断力、コミュニケーション力、人間力などの総合的力量と実践的指導力を目指すものである。

実際の授業では、ケース教材の設問について、「考える」、「討論する」、「話し合う」などの具体的活動を通して、「どのような問題があるのか」、「どうしたらいいのか」、「指導はどうするのか」、「自分は何をするのか」、「担当教員とどう連携するのか」、「保護者への対応は何か」、「関係機関（地域の団体、市教委、PTA役員、警察、児相など）との連絡や連携はどうするのか」、「他の教員との連携」、「児童生徒および保護者の信頼を得るにはどうしたらよいか」など、学校現場に関わる多くの具体的事項を取り上げて、教員としての思考訓練を繰り返して行った。

(2) ケース教材

ケース教材は、授業テーマに関わる小中学校で実際に起こった問題を事例として考えた。ケース教材で取り上げられた事例のなかで、問題や課題と考えられることは何なのか、どのように対応したらいいのかなどは、ケースを読む学生一人ひとりの受け止め方によって違うことが予想される。そのケースのねらいは何か、ケースを通じて何を訴えているのか、ケースに登場する人物の人間関係上の問題点はないのか、など多くの問題や課題を提起しながら、教員としての望ましい対応の仕方を期待した。最終的には、その問題をどのように解決したらよいか、学生一人ひとりが自分の問題として考えることをねらった。換言すれば、今後遭

遇する出来事に対し、適切な判断と意思決定が迅速にできることをねらった。

ケースメソッド授業は、ケース教材に含まれる問題について一定の結論へと学生の思考を導いていく役割はあるが、結論がでないオープンエンドのこともある。授業ではそうしたこともいいと考えた。学生がその場で語られたことを実感し、その時自らが何を思い、どう感じ、他の学生がどのような発言をし、それに対してどのような意見が出されたのかなど、暗黙知の部分も多いからである。

一方、教員を目指す学生には、人間関係の構築は重要課題である。現在の大学生が、所属学科やクラスなどの組織内での人間関係が不得手であり、人間関係を避ける傾向が見られることは問題と言える。人とのコミュニケーション力、討論する力、対話や会話ができる力などは、短兵急に身に付くものではない。気の合った友だちとは話ができるが、公式場面で自分の意見と考えを述べることは簡単にはできない。そうしたスキルや態度などは、授業を通して養っていくことが必要である。こうした資質能力やスキルは、講義形式の受け身の授業からは期待できるものではなく、討論やコミュニケーションスキル、人間関係を含む自他の感受性訓練には、その育成をねらった授業デザインの構築が求められる。こうした力を磨いていく場を、意図的・計画的に設計するのがケースメソッド授業である。

Case4 児童会活動について考える

今年大学を卒業したばかりのA先生がB小学校にやってきた。B小学校は、市街地から離れた郊外に新設された3年目を迎える学校である。自然に囲まれ全校児童数327名で各学年2クラス、教職員数17名の中規模校である。四方は緑の山に囲まれており、どこか牧歌的な匂いがする学校でもある。児童は元気で明るく素直な性格を持った子どもたちで、誰もがすくすくと育っている感じである。学年を超えて顔見知りの子どものも多い。

A先生は4年1組の担任になり、新任とはいえ、仕事ではいろいろな係りが回ってきた。彼女自身も何をどうすればいいかはよく分からない事も多かった。子どもを前にすると、とにかく全力でぶつかる以外に方法はないのである。四の五の言っている暇はない。毎日の授業の準備に追われ、遅くまで学校に残ることが常態化していたが、やる気と体力とは誰にも負けないという自負心は持っていた。

この度、恒例の学校行事である7月の七夕交流会では、近くのC幼稚園の園児を招いて小学校で交流会をするようになった。A先生がその責任者になり実施計画案を職員会に提案することになった。A先生は、教員採用試験の対策の一つとして、そうした内容のことを思い出した。「そうだ。あの時に簡単な指導案を書いて、模擬授業をしたことがある。あの延長でやってみよう」と急に元気が出てきた。その七夕交流会では、先ず、何をするかを児童会で考えさせてみよう。次に、その児童会の運営をどのようにしたら、児童の主体的活動が効果的に発揮されるのだろうか。お互いの子どもの心に残る思い出づくりの集会にしたいが、何か具体策はあるだろうか、などについて思いを馳せた。結局、時間をかけていろいろな考えをあれこれ描いてはみたものの、なかなかまとまらない。またこの機会を園側と学校側の連携を深める機会にも繋げたい。七夕交流会を有意義なものにして、園児と児童らに楽しい時間を共有させたい。さ

らには、幼小連携を踏まえながらも、子どもたちの心に残る集会にしたいと考えていた。そうこうしているうちに、数日が経過してしまった。教務のD先生から、「A先生、七夕交流会の実施案はできている？」と尋ねられ、「いえ、まだ全部はできていません。いろいろな思いがあって、考えがまとまらないんです…」「そうですか。あまり欲張らない方がいいよ。実施案は6月20日(月)の職員会前に提案してもらいますが、その前に、来週の運営委員会で検討するので、それまでに私に出してください。書き方が分からなければ遠慮しないでね」と笑顔で言われた。「はい、有り難うございます。何とか仕上げて持ってきます」と返事はしたものの、「D先生も忙しいから、あまり迷惑をかけてはいけないな。何とか早く仕上げよう。こればかりに時間はかけてもいられないから」と思い直して頑張るA先生であった。

設問1 A先生は、児童会委員にどのような内容の七夕交流会を計画させ、また児童と園児の思い出づくりのために、どのような活動を取り入れるのだろうか。

設問2 A先生は、どのような七夕交流会の実施計画案を作成するのだろうか。下の実施案形式に書いてみよう(◆印の内容を自分で考えて書く)。

平成23年度「七夕交流会」実施計画案 担当者(◆自分の氏名)	
【ねらい】◆ <u>各自考える(簡条書きがよい)。</u>	
【実施日】平成23年度7月7日・5限13:20~14:05	
【会場】体育館	
【対象者】全校児童・C幼稚園児年長組42名	
【事前活動】	
<ul style="list-style-type: none"> ・6月9日(木) 児童会で七夕会について説明 ・6月18日(金) 運営委員会で検討 ・6月20日(月) 職員会提案 	
当日の流れ(学習活動・内容)	教師の支援・留意点
13:00 各学級廊下に整列し体育館に入場。 司会・進行は6年児童会委員がする。 13:05 体育館で整列(児童会委員長) 13:10 園児入場(拍手で迎える) ◆ <u>以後のプログラムを各自で考える。</u>	・園児は12:50に図書室に待機。 (5年生の児童会委員がお世話をする。) ◆ <u>左側の当日の流れに対応した教師の支援・留意点を書く。</u>

(3) 個人学習

個人学習は授業前の予習である。大学の設置基準では大学1単位は45時間となっている。授業1週間前に、次週のケース教材が配布されるので、学生はその教材を読み、個人学習の手引を参考にしながら、ケースレポートを作成する必要がある。事前に自分でケース教材を学習しておかなければならない。学士力の質保証の視点では授業以外の家庭学習が必要なので、個人学習は授業時間以外の学習時間が担保できる。

特別活動指導法（初等）の個人学習の手引き
【ケース名】児童会活動について考える
<p>【ケースの概要】</p> <p>新任のA先生は、幼稚園との七夕交流会を任された。そこで児童会委員の5、6年生に七夕交流会を計画させることにした。活動を通して集団の一員としての児童の望ましい人間関係ができていくと考えていた。そうした活動を実際に行うには、先ず担当者としての実施案作成が前提となる。園児にも児童にも思い出に残る交流会にしたいと意欲的に取り組むのだが、職員会に提案する指導計画案がまとまらないA先生であった。</p>
<p>【学習のテーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・七夕交流会を通して、子どもたちの望ましい人間関係づくりができる。 ・児童と園児の双方に思い出深い交流会となる実施計画案が作成できる。 ・児童会委員を中心に、一人ひとりが七夕交流会に参画し協力できる実践力を育てる。
【キーワード】・児童会活動、学校行事、七夕交流会、実施計画案、幼小連携、幼稚園
<p>【事前学習・考えてみよう】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A先生はどのような思いで実施案作成に取り組んでいるか。 ・A先生は実施案作成に時間がかかっているが、何か、作成しやすい手引き等はないのか。 ・幼小連携教育は、具体的にどのようなことをするのだろうか。また幼少連携は実際に進展しているのだろうか。 ・学級で望ましい人間関係づくり（教師と児童、児童同士）を進めていくには、教師は日頃からどのようなことに留意や配慮をしたらよいのだろうか。 ・D先生は忙しそうだが、教務主任はどういった仕事をするのだろうか。

(4) ティーチング・ノート

ティーチング・ノートは、授業を行う教員の授業プランである。授業では「ケース教材」と一緒に「個人学習の手引」を配布しているのので、基本的には、学生の「個人学習の手引」内容に沿ったティーチング・ノートを作成した。ティーチング・ノートは、いわば、教授用の授業内容を簡潔に記した指導略案である。ケースメソッド授業を進める教員が、ケース教材を使ってどのように授業をデザインし、学生主体型の授業を進めていくかについての大きな道標と考えられる。またティーチング・ノートは、授業のまとめで使用した。

ティーチング・ノート
<p>【ケース名】 児童会活動について考える</p>
<p>【ケースの概要】</p> <p>新任のA先生は、幼稚園との七夕交流会を任された。そこで児童会委員の5、6年生に七夕交流会を計画させることにした。活動を通して集団の一員としての児童の望ましい人間関係ができていくと考えていた。そうした活動を実際に行うには、先ず担当者としての実施案作成が前提となる。園児にも児童にも思い出に残る交流会にしたいと意欲的に取り組むのだが、職員会に提案する指導計画案がまとまらないA先生であった。</p>
<p>【学習のテーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が集団の一員としての自覚を持つには、具体的な七夕交流会でどのような指導が必要だろうか。 ・七夕交流会を児童に運営させるには、教師側には、どのような配慮や留意が必要か。 ・幼小連携の望ましいあり方を考える。
<p>【キーワード・事前学習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会活動、学校行事、七夕交流会、実施計画案、幼小連携、幼稚園
<p>【設問】</p> <p>設問1 A先生は、児童会委員にどのような内容の七夕交流会を計画させ、また児童と園児の思い出づくりのために、どのような活動を取り入れるのだろうか。</p> <p>設問2 A先生は、どのような七夕会の実施案を計画するだろうか。下の実施案に書いてみよう。</p>
<p>【ティーチング・ポイント】</p> <p>【設問1 A先生は、児童会委員にどのような内容の七夕交流会を計画させ、また児童と園児の思い出づくりのために、どのような活動を取り入れるのだろうか。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会委員のアイデアを尊重しながら、子どもたちが自分たちで計画して実践できた達成感を味わわせるようにするだろう。 ・園児が安全に七夕交流会を楽しめるように、細心の配慮をして小学校に親しみが持てるようにする。無理な活動は取り入れない。 ・演技を取り入れて、小学校生活、学校行事、給食などの学校生活の流れを分かりやすく伝える。 ・園児が知っている歌と踊りを発表する。 ・織姫と彦星の話の役割演技をする。 ・七夕のアニメを見せる。 <p>【設問2 A先生は、どのような七夕会の実施案を計画するだろうか。下の実施案に書いてみよう。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校生活、給食、清掃活動、運動会、遠足、勉強などの学校生活の紹介をする。 ・児童自身が楽しいと感じている活動を寸劇や役割演技を使って紹介する。

【考えてみよう】**【A先生はどのような思いで実施案作成に取り組んでいるか。】**

- ・児童の自主的活動が促進でき、協力して課題達成ができる七夕交流会を考えている。
- ・児童会を中心にした全校的取組が進められることを視野に入れている。
- ・園児の安全面に配慮した活動を考えている。
- ・児童と園児の双方が楽しかったと実感する思い出に残る活動を考えている。

【A先生はどのような思いで実施案作成に取り組んでいるか。】

- ・自分自身の思いが実現するとともに、子どもたちに心に残る行事にしたいと考えて、あれこれ試行錯誤している。
- ・児童が集団の一員としての自覚を持つには、具体的にどのような指導が必要か、教師はどのような配慮や留意が必要か、幼小連携の望ましいあり方と姿はどのようなものかなどを考えている。

【A先生は実施案作成に時間がかかっているが、何か、作成しやすい手引き等はないのか。】

- ・七夕交流会は、恒例と書いてあるので、B小学校が毎年行っている学校行事である。
- ・平成22年度の七夕交流会の実施計画案を参考にして、A先生自身が考える新しい取り組みを付加していく方がやりやすいだろう。
- ・昨年度の実施案を作成した同僚教師がいれば、実施案作成で迷っている内容等を相談することが早道である。
- ・自分で考えることは大切だが、学校は組織で仕事をしている。率直に尋ねる姿勢と習慣を体得することは大切である。特に若いA先生にはそうしたことが必要である。

【幼小連携教育は、具体的にどのようなことをするのだろうか。また幼少連携は実際に進展しているのだろうか。】

- ・校種が異なる学校間の接続は注目されており、幼小連携、小中連携、中高連携、高大連携など、その必要性が言われている。
- ・実際面での連携は、様々な学校間の課題をクリアしないと連携が進まないようである。

【学級で望ましい人間関係づくり（教師と児童、児童同士）を進めていくには、教師は日頃からどのようなことに留意や配慮をしたらよいのだろうか。】

- ・常日頃から、児童に目配り気配りをして、一人ひとりの児童の特性を把握し、児童理解を深める努力を積み重ねていくことが重要である。
- ・どの子にも公平に温かい態度で接すること。
- ・笑顔と明るさを失わず、子どもが怖がるような態度を取らない。
- ・感情的な言動を表明しないで、穏やかに子どもに接していく。

【D先生は忙しそうだが、教務主任はどういった仕事をするのだろうか。】

- ・教務主任は実際の教育課程を編成してそれを実行する役割を担っている。
- ・教育課程における校務分掌と学校運営に関する連絡調整と指導助言を行っている。
- ・学校の仕事全体に関わっているため、全教職員との人間関係は重要な要因である。
- ・大きな学校行事の実施案は教務主任が作成するが、他の校務分掌でも教務主任との関わりは深い。
- ・日課行事や転出入等の教務事務をはじめ、多くの校務に関わる忙しい仕事をしている。

【資料等】

- ・七夕交流会の実施案形式
- ・日本特別活動学会監修「キーワードで拓く新しい特別活動」東洋館出版社
- ・川野司著「実践！学校教育入門」昭和堂、文部科学省「小学校学習指導要領解説特別活動編」

(5) 授業アンケート

学生による授業評価として、表1の17項目の授業アンケートを作成した。質問項目「あなたはこの授業が楽しいと思いますか」を学生の満足度をみる指標とした。

表1 授業アンケート

23年後期授業アンケート（ ）月（ ）日（発達・基礎）コース2年 氏名（ ）	
「ケースメソッド授業」について、各問に当てはまる番号に○印を付けてください。	
4：あてはまる 3：ややあてはまる 2：あまりあてはまらない 1：あてはまらない	
【グループ討論前】	
① 私は個人学習（予習）ができています。	4・3・2・1
② 私はレポートを書いている。	4・3・2・1
③ 私は今日のケースに興味関心がある。	4・3・2・1
④ 私は今日の設問の内容を理解している。	4・3・2・1
⑤ 私は今日のグループ討論に貢献できると思う。	4・3・2・1
⑥ 今日のグループ討論はうまくできると思う。	4・3・2・1
【グループ・クラス討論後】	
⑦ 私は今日のグループ討論で積極的に発言した。	4・3・2・1
⑧ 今日のグループ討論は、グループ全体としてうまくできた。	4・3・2・1
⑨ 今日のグループ討論を通して、設問に対する私の理解が深まった。	4・3・2・1
⑩ 私はクラス討論で積極的に発言した。	4・3・2・1
【今日の授業について】	
⑪ あなたはこの授業に存在感がありましたか。	4・3・2・1
⑫ あなたは自分で考える力や習慣が身に付きましたか。	4・3・2・1

⑬ あなたは自分が授業に参加している実感がもてましたか。	4・3・2・1
⑭ あなたはこの授業が楽しいと思いますか。	4・3・2・1
⑮ 本日の授業は100点満点の自己評価で何点ですか。	() 点
⑯ 本日の授業で良かったこと、ためになったことについて、あなたの意見を聞かせてください。	
⑰ 授業のミニレポート (感想など)	

(6) 回答結果

表1の授業アンケートの回答結果を校種ごとにまとめたものが下の図1と図2である。図1、2は、質問項目のカテゴリー「あてはまらない」に1点、「あまりあてはまらない」に2点、「だいたいあてはまる」に3点、「あてはまる」に4点を与え、各質問項目の割合を示している。「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」を否定的回答、「だいたいあてはまる」と「あてはまる」を肯定的回答と考えた場合、多くの質問項目が肯定的回答である。質問項目「私はクラス討論で積極的に発言した」、「私は今日のグループ討論で積極的に発言した」、「今日のグループ討論はうまくできると思う」、「今日のグループ討論に貢献できると思う」などは、グループやクラス全体での討論について尋ねる内容であり、否定的回答の割合が高かった。このことは、実際の授業場面での学生を見て感じることである。学生が意欲的・積極的に討論授業に参加できるように授業改善をする大きな視点である。

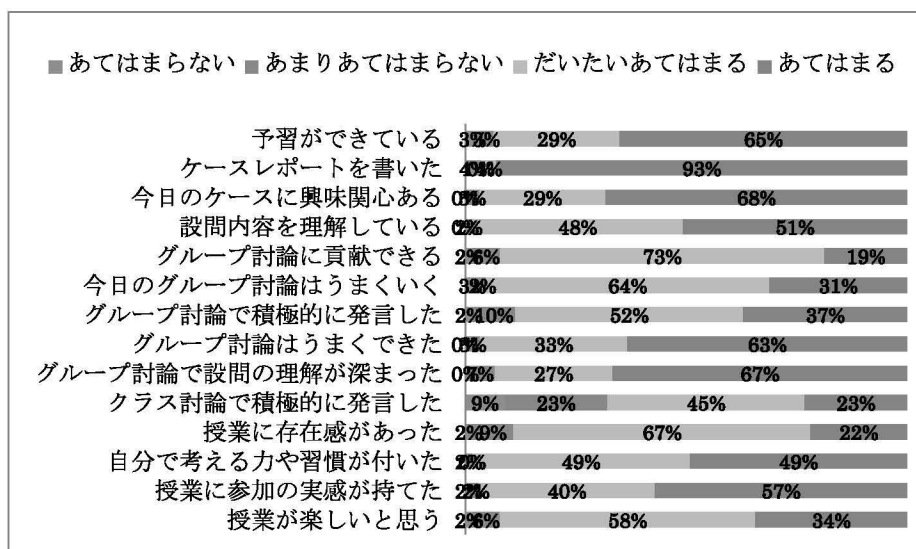


図1 回答結果の割合 (初等 n=62)

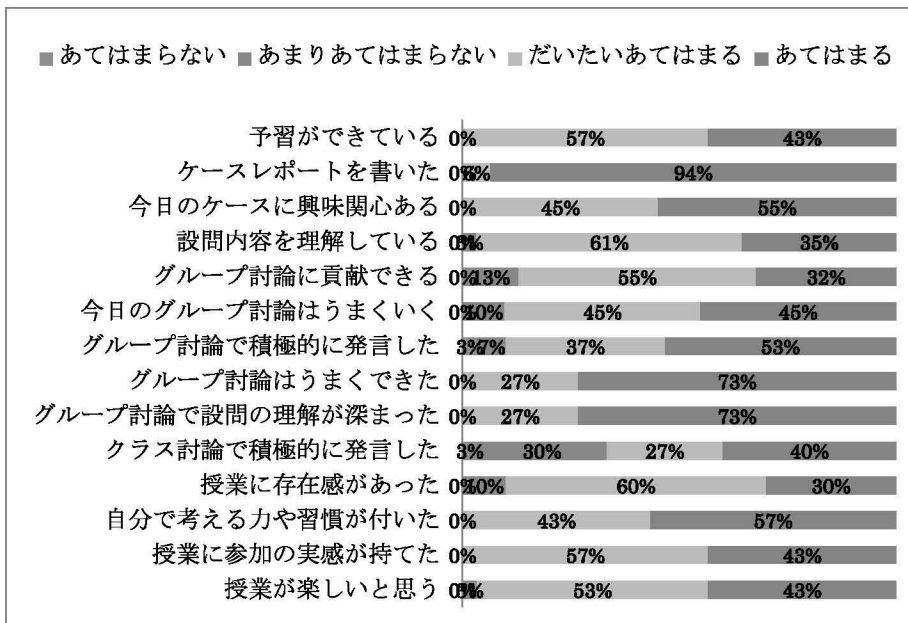


図2 回答結果の割合 (中等 n=30)

校種と「私はクラス討論で積極的に発言した」をグラフで示したのが図3である。クラス討論において、積極的発言は初等・中等コースともに否定的回答が3割程度である。討論の意欲的取り組みが授業改善の一つである。

各質問について、「あてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「ややあてはまる」を3点、「あてはまる」を4点として、平均点と標準偏差得点を求めた(表3)。

平均点が高い上位3項目は、「私はレポートを書いている」(3.89)、「今日のグループ討論を通して、設問に対する私の理解が深まった」(3.66)、「今日のグループ討論は、グループ全体としてうまくできた」(3.66)、「私は今日のケースに興味関心がある」(3.63)であった。

一方、平均点が低い3項目は、「あなたは授業に存在感がありました」(3.15)、「私は今日のグループ討論に貢献できると思う」(3.14)、「私は今日のクラス討論で積極的に発言した」(2.92)であった。また、特に偏差が大きい項目は、「私はクラス討論で積極的に発言した」(0.913)、「私は今日のグループ討論で積極的に発言した」(0.719)、「私は個人学習(予習)ができている」(0.692)であった。これら偏差が大きい項目は、グループ討論やクラス討論に関わる内容であり、学生の討論への積極性と消極性がうかがわれる。

		私はクラス討論で積極的に発言した				
		あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	
校種 (小中)	全体	7%	25%	37%	31%	n=88
	初等	9%	22%	43%	26%	n=58
	中等	3%	30%	27%	40%	n=30

図3 クラス討論で積極的に発言した割合

表2 回答結果（一部のみ掲載）

私は個人学習(予習)ができています。	私はレポートを書いている。	私は今日のケースに興味関心がある。	私は今日の設問の内容を理解している。	私は今日のグループ討論に貢献できると思う。	私は今日のグループ討論はうまくできると思う。	私は今日のグループ討論で積極的に発言した。	今日のグループ討論はグループ全体としてうまくきた。	今日のグループ討論を通して設問に対する私の理解が深まった。	今日のグループ討論を通して設問に対する私の理解が深まった。	私はクラス討論で積極的に発言した。	あなたはこの授業に存在感がありましたか。	あなたは自分で考える力や習慣が身に付きましたか。	あなたは自分が授業に参加している実感がちぎれましたか。	あなたはこの授業が楽しいと思いますか。
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
4	4	4	4	3	3	3	4	4	3	3	3	4	4	3
4	4	4	4	3	3	4	4	4	3	3	3	3	3	3
4	4	4	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4
4	4	4	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4
4	4	4	4	3	3	3	3	3	2	3	4	3	4	4
4	4	4	3	3	4	4	3	3	2	3	3	3	4	4
4	4	4	4	2	2	2	3	4	2	2	4	3	3	3
4	4	4	3	3	4	4	4	4	3	4	3	4	4	3
4	4	4	4	4	4	3	4	3	4	3	3	3	3	3
4	4	4	3	3	4	3	4	4	3	3	4	4	4	3

表3 平均値・標準偏差

項目名	件数	平均値	標準偏差
ケースレポートを書いた	91	3.89	0.482
グループ討論で設問の理解が深まった	93	3.66	0.561
グループ討論はうまくできた	93	3.66	0.521
今日のケースに興味関心ある	97	3.63	0.527
予習ができています	97	3.56	0.692
授業に参加の実感が持てた	96	3.51	0.580
自分で考える力や習慣が付いた	96	3.51	0.562
設問内容を理解している	97	3.45	0.540
グループ討論で積極的に発言した	94	3.31	0.719
授業が楽しいと思う	96	3.31	0.621
今日のグループ討論はうまくいく	97	3.29	0.645
授業に存在感があった	96	3.15	0.615
グループ討論に貢献できる	97	3.14	0.595
クラス討論で積極的に発言した	88	2.92	0.913

次に「あなたはこの授業が楽しいと思いますか」の質問を授業への「満足度」の指標として、この項目と他の13項目との相関係数を求めた。やや強い相関がある項目（0.5以上）は、「あなたは自分で考える力や習慣が身に付きましたか」（0.50）であり、やや弱い相関（0.3以上0.5未満）は、「あなたはこの授業に存在感がありましたか」（0.49）、「あなたは自分がこの授業に参加している実感がもてましたか」（0.46）、「私は今日のケースに興味関心がある」（0.46）、「今日のグループ討論はうまくできると思う」（0.44）、「私は今日のグループ討論に貢献できると思う」（0.41）であった。

表4 質問項目の平均・関連度(相関係数)

質問項目	平均値	目的変数の関連度
予習ができています	95.8%	0.30
ケースレポートを書いた	97.8%	0.18
今日のケースに興味関心ある	97.9%	0.45
設問内容を理解している	97.9%	0.28
グループ討論に貢献できる	90.6%	0.42
今日のグループ討論はうまくいく	93.8%	0.43
グループ討論で積極的に発言した	90.3%	0.36
グループ討論はうまくできた	97.8%	0.25
グループ討論で設問の理解が深まった	95.7%	0.23
クラス討論で積極的に発言した	67.8%	0.35
授業に存在感があった	89.5%	0.49
自分で考える力や習慣が付いた	98.9%	0.50
授業に参加の実感が持てた	97.9%	0.47
平均	93.2%	0.36

次に、「あてはまる」か「ややあてはまる」のいずれかに回答したものを「該当する」に、「あまりあてはまらない」か「あてはまらない」のいずれかに回答したものを「該当しない」にして、各質問について2段階に対する回答数および割合(%)を算出して、割合について図4の「満足度グラフ」を作成した。この満足度グラフは、「該当する」の割合で並び変えた。但し満足度の指標とした「授業が楽しいと思う」の項目は除いた。

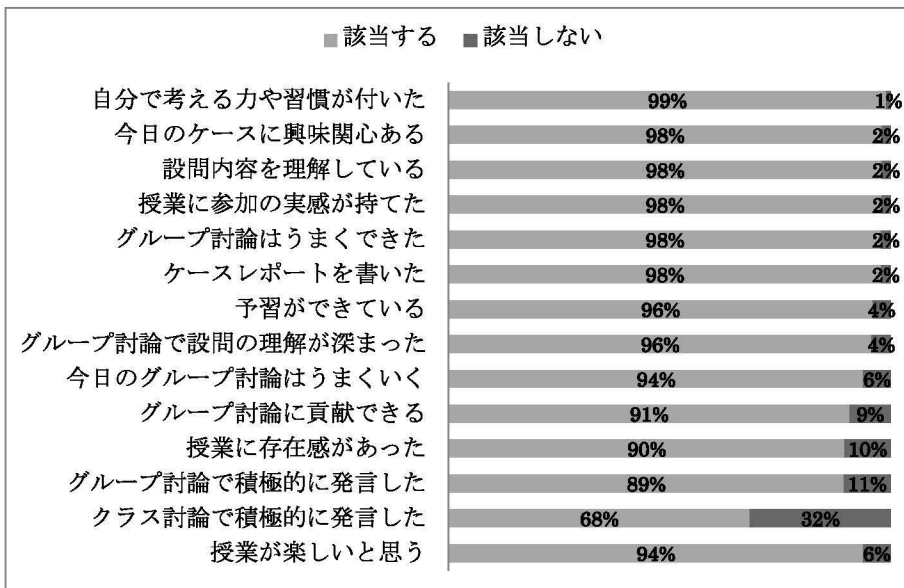


図4 満足度グラフ

また満足度の割合を縦軸にし、満足度との相関係数を横軸にとり、13項目の平均点をプロットした図5の「CSグラフ」を作成した。CSグラフの横線と縦線は、「該当する」の割合（%）と「単相関係数」の平均点である。CSグラフは大きく4つの象限に分けられる⁽³⁾。

第1象限は目的変数「授業が楽しいと思う」の満足度も関連度もともに高い領域である。これは学生がその項目について大きな評価を与えていると考えられる。目的変数に関する授業の特色や強みと言える。2象限は目的変数の満足度は高いが、その関連度がマイナスになっている領域である。そのままの状態を維持するか、改善度を高めることに努めたい項目である。第3象限は目的変数も関連度もともにマイナスの領域である。南学によれば「第Ⅲ象限は満足度は低いものの、重要度も高くないので、満足度を上げる努力はすべきかもしれないが総合的満足度においてはあまり貢献しない領域となる」と述べている。しかし、「満足度においてはあまり貢献しない領域となる」と述べていることは疑念を持たざるを得ない。満足度も関連度もともに低いからこそ、その要因を分析して満足度を高めるための授業改善が必要ではないだろうか。第4象限は関連度は高いが満足度が低い領域であり、授業改善では最も大切な領域である。この右下の第4象限にプロットされている項目は、目的変数である「授業が楽しいと思う」との相関はあるのだが、満足度の割合が低くなっている。これは、その項目を改善して満足度を高める必要があることを意味している。

このグラフより、項目12「あなたはこの授業に存在感ありましたか」は、「授業が楽しいと思う」とやや弱い相関があるにも関わらず満足度は平均を下まわっている。同様に項目11「私はクラス討論で積極的に発言した」は、相関は平均よりも低い、満足度は大幅に平均か

ら離れている。この2つの項目は満足度の指標から見た場合、特に改善を図る必要がある。CSグラフだけでは改善度が分かりにくいので、改善度を数値で示した改善度指数（表5）を用いるとより改善度が分かる。表5からは項目6、11、12について改善を図ることが分かる。改善度指数が5以上は改善すべき内容である。特に10以上は即改善を要する項目であり、5以上は要改善の項目である⁽⁴⁾。項目12「あなたはこの授業に存在感ありましたか」と項目11「私はクラス討論で積極的に発言した」の2つは、すぐにも改善を図ることが必要である。また項目6「今日のグループ討論はうまくできると思う」は、すぐにはないが改善を要する内容である。

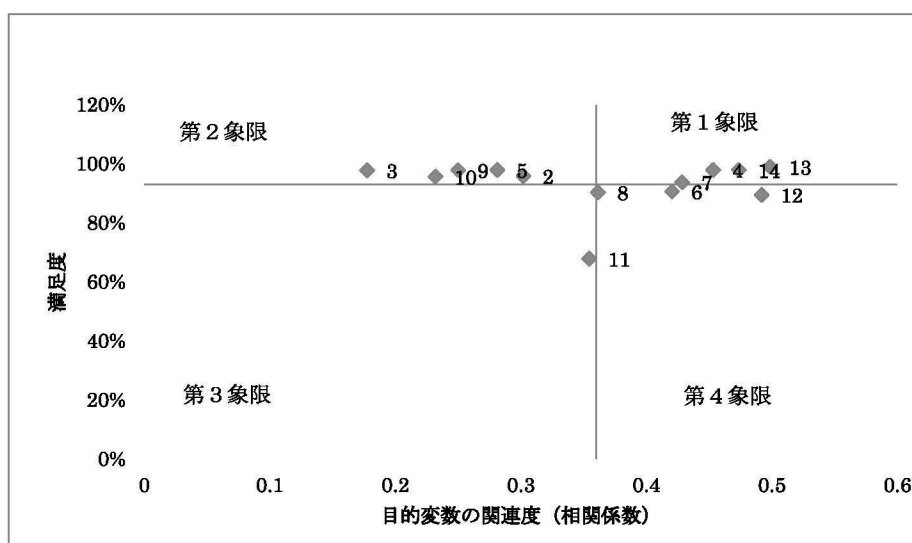


図5 CSグラフ

表5 改善度指数

質問項目	平均値	目的変数の関連度	改善度指数
クラス討論で積極的に発言した	67.8%	0.354	21.87
授業に存在感があった	89.5%	0.492	12.13
グループ討論に貢献できる	90.6%	0.420	6.21
自分で考える力や習慣が付いた	98.9%	0.499	4.20
今日のグループ討論はうまくいく	93.8%	0.428	3.99
授業に参加の実感が持てた	97.9%	0.474	3.43
グループ討論で積極的に発言した	90.3%	0.361	2.42
今日のケースに興味関心ある	97.9%	0.453	2.00
予習ができています	95.8%	0.302	-6.54
設問内容を理解している	97.9%	0.281	-9.81
グループ討論で設問の理解が深まった	95.7%	0.232	-11.20
グループ討論はうまくできた	97.8%	0.250	-11.87
ケースレポートを書いた	97.8%	0.178	-16.82

表5の改善度指数をグラフに示したものが図6である。改善度指数がマイナス（-）は、改善の必要がないと考えられる。改善度指数が5以上が改善が必要な内容項目である。

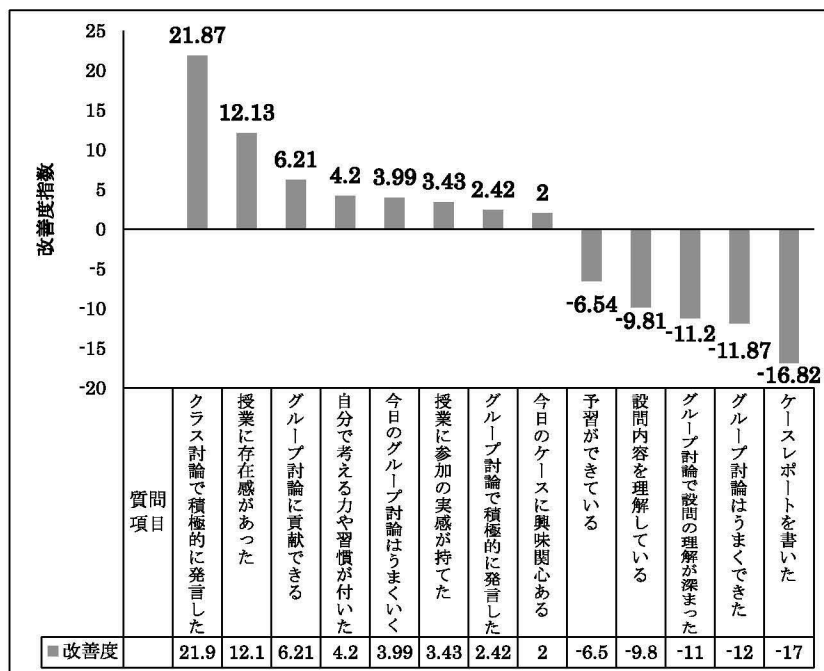


図6 改善度

3 考察

現在、大学授業は、教員中心から学生中心への転換が求められている。授業自体が、学ぶ側の学生からの発想で行われる必要がある。これは大学授業のパラダイムシフトと言えることである。大学に入学する学生も多様化しており、大学はそうした学生の期待にこたえる必要がある。学力だけを取り上げてその開きは大きい。AO入試を見直す動きも見られるし、秋入学も検討され始めている。

私自身は、学生が学ぶ意欲を高め、主体的に授業に取り組めるように参加討論型の授業を実践している。この実践している授業をケースメソッド授業を命名している。その概要については最初にまとめている。ポイントはケース教材の開発とティーチング・ノートの作成である。現在の実践を通して、学生の学ぶ意欲を高めるためには、ケースメソッド授業は効果的である⁽⁵⁾。

また授業アンケートは授業を見直す場合に役立つものである。学生一人ひとりが自由に記述している授業感想や要望を読むことが次の授業準備に役だっている。一方、授業に関するアンケート調査を割合でまとめることで、学生の理解や授業内容を振り返る際に役立つが、アンケートデータを授業改善に役立てる視点で見直したのが、今回のCS分析である。学生による授業評価についていろいろな分析がなされているが、その活用となると難しい面があることも事実である。今回、CS分析を取り入れることで改善項目が明確になったが、それは、授業をするなかで肌身で感じている内容であった。そういう意味では教員の感覚的判断とデータによる結果が同じ方向を示していたことは収穫であった。CS分析については、まだ不十分な取り組みであるが、これからCS分析について深めていきたいと考えている。

注

- (1) 松本幸生・塚本弥八郎「CS分析の考えを導入した授業評価アンケートの分析と授業改善ポイントの定量化」京都大学高等教育研究第10号 2004年
- (2) 沖縄国際大学ホームページ「沖国大のFD活動」<http://www.okiu.ac.jp/index.jsp>
2012年5月9日取得
- (3) 南 学「学生による授業評価へのCS分析の適用」三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第27号 PP.29-34 2007年
- (4) 菅民郎著『すべてがわかるアンケートデータの分析』現代数学社 2010年
- (5) 川野司「教職課程におけるケースメソッド授業」九州女子大学紀要 第48巻2号
PP.53-70 2012年1月

CS analysis of case method teaching

Tsukasa KAWANO

Department of Education and psychology, Faculty of
Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishi-ku, Kitakyushu-Shi Fukuoka 807-8586 Japan

Abstract

This paper examines college students' satisfaction regarding the use of 'Case Method' class in an elementary school setting. This paper exercises Customer Satisfaction (CS) analysis, which has been widely use applied in various marketing, psychological, and sociological fields and is now even used in the educational fields. The CS index of the class shows clearly that the students should be more active in learning the case method as well as be positive in their attendance in classes. And also, it suggests the need to improve the students' ability for discussion and debate. This case study shows the CS analysis is not only effective in improving students' evaluation methods but also in motivating students' learning by the case method program.

Keywords: case method, cs analysis, customer, satisfaction